

コミッション・キャピタリズムの生成と展開
——イギリスの覇権は世界史に
何をもたらしたのか

玉木俊明 京都産業大学
世界資本主義フォーラム

消費財の増加

- ヨーロッパの海外進出
- 消費財の輸入 香辛料・茶・コーヒー・砂糖
- Industrious Revolution 速水融とJan de Vries
- 勤勉革命と働き方革命
- 市場経済の確立へ
- 情報の非対称性の減少
- 経済情報入手の容易性

大西洋経済と綿花

- 18世紀、とくに後半のヨーロッパ経済 砂糖の重要性
- ブラジル→カリブ海諸島 サトウキビ・砂糖
- セファルディム（15世紀末にイベリア半島から追放されたユダヤ人）の移動
- 綿花の生産 毛織物から綿織物へ
- 動物性繊維→植物性繊維→化学繊維
- セファルディムの影響からの脱出

カリブ海地図

アメリカ合衆国
フロリダ半島

バハマ

キューバ

英領ケイマン諸島

ジャマイカ

ハイチ

ドミニカ
共和国

米領
プエルトリコ

英領バージン諸島

英領アンギラ

米領バージン諸島
セントキッツ・ネイビス

グアデルーペ

ドミニカ

マルティニーク

セントルシア

バルバドス

蘭領アルバ / キュラソー

グレナダ

トリニダード
トバゴ

イギリスの海運業発展

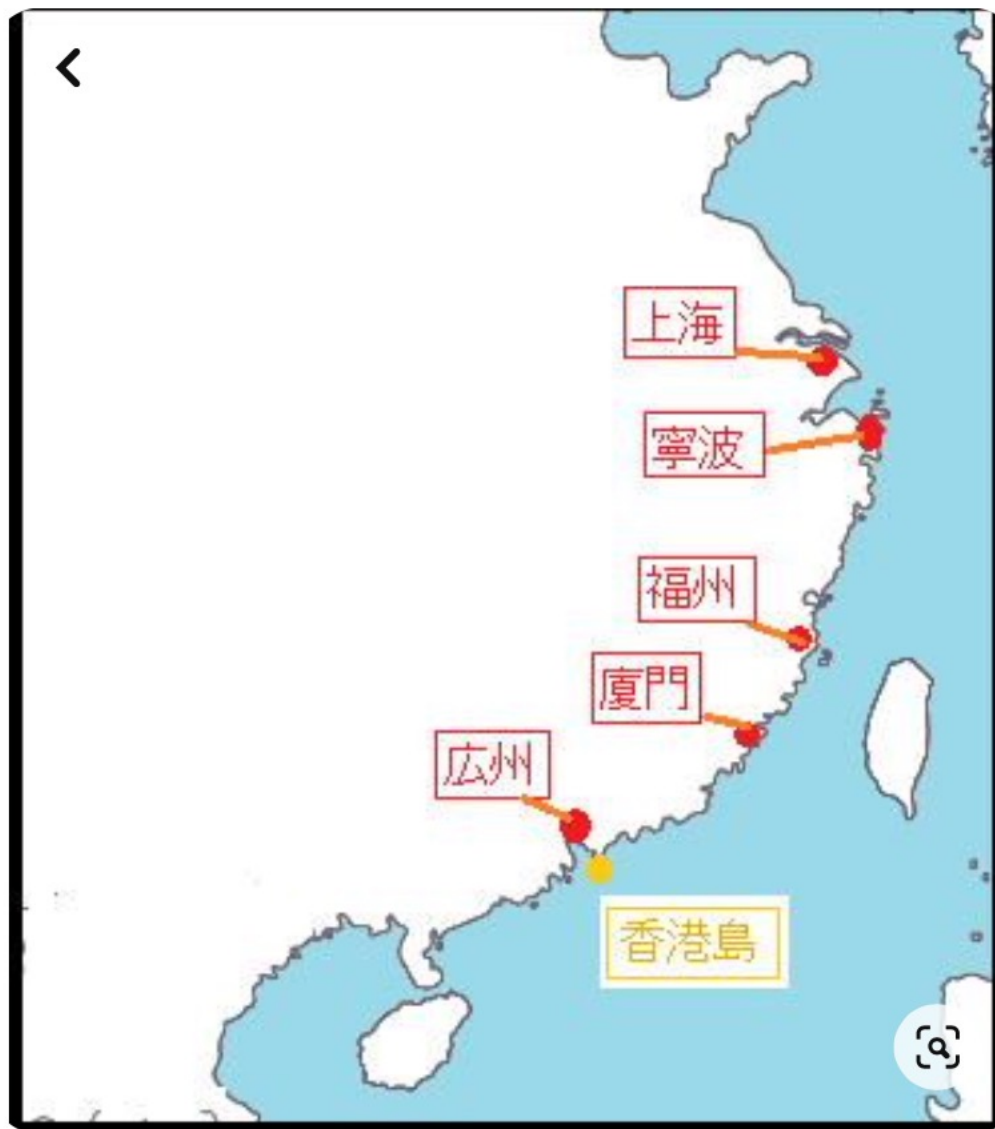
- オランダ、スペイン、ポルトガルはいうにおよばず、ハンブルク、さらにはリューベックという都市と比較しても劣っていた
- 1651 航海法
- イギリス人が所有する船舶のトン数は、1572年の5万トンから1788年の105万5000トンへと、200年ほどで21倍も増加
- 海運業の発展
- 保護海運業政策

イギリス海運業の発展とラテンアメリカ諸国——ラテンアメリカ諸国はなぜ独立に成功したのか

- 砂糖などの輸出 宗主国
- フランス革命・ナポレオン戦争
- ロンドンとハンブルクへ
- イギリスのラテンアメリカ諸国への投資額
- 1826年が2500万ポンドだったのが、1895年になると5億5000万ポンド、1913年
が11億8000万ポンド
- 鉄道
- 蒸気船
- 中間商人としてのイギリス

アジアの物流を支配したイギリス

- 清 1757年以降、外国との貿易は広州一港に
- 1842年の南京条約により、広州、福州、厦門、寧波、上海の五港が開港
- イギリスの船が多数使用される
- ジャンク船→蒸気船
- 1870-1941 アジア域内交易とイギリス船



中国の港に入 港する船

中国の港に入港する遠洋航海の船舶のトン数（蒸気船） 1,000 トン

年度	イギリス船	フランス船	ドイツ船	日本船	中国	全体
1872	652	58	81	-	-	945
1882	1,463	80	182	97	86	2,023
1892	2,439	124	363	218	147	3,460
1902	3,627	316	1,024	1,224	379	7,224
1912	4,931	600	1,310	2,991	2,006	12,848

出典:Hsia Liang-lin, *China's Foreign Trade Statistics, 1864-1949*, Cambridge Mass., 1974, pp.226-231.

中国の港を入港する沿岸航海のトン数（蒸気船）1,000 トン

年度	アメリカ船	イギリス船	ドイツ船	日本船	中国	全体
1872	1,633	1,330	223	-	18	3,303
1882	64	3,956	257	-	2,300	6,679
1892	36	7,220	371	98	3,113	11,240
1902	466	9,789	2,588	2,455	4,263	19,749
1912	556	14,103	1,775	6,930	6,584	30,144

出典:Hsia Liang-lin, *China's Foreign Trade Statistics*, pp.240-245.

なぜイギリスにだけ非公式帝国があったのか？

- イギリスの非公式帝国
- 植民地ではないが、植民地同然の状態におかれた地域 中国やラテンアメリカ
- イギリスの直接投資
- イギリスの商船隊
- 大英帝国を支えた海軍

電信はどれほど重要か

- 電信の発明
- 1837年にイギリス人のクックとホイーストンが特許を取得
- 電信と決済
- 敷設に巨額の費用
- 人間の移動スピードよりも情報が速く伝わる
- 中間商人としての電信

電信が縮 めた世界

表 電信導入以前と以後の外国との通信の発展 各都市からロンドンまでの情報伝達の所用日数

	a: 1820	b: 1860	c: 1870	a-b	b-c
アレクサンドリア	53	10	2	43	8
マデイラ	30	14	2	16	12
ケープタウン	77	39	4	38	35
ボンベイ	145	26	3	119	23
カルカッタ	154	39	2	115	37
香港	141	54	3	87	51
シドニー	140	53	4	87	49
バルパライソ[チリ]	121	47	4	74	43
ブエノスアイレス	97	41	3	56	38
リオデジャネイロ	76	28	3	48	25
バルバドス	46	21	4	25	17
ハバナ	51	19	4	32	15
ニューオルレアン	58	19	3	39	16
ニューヨーク	32	13	2	19	11

[出典]Yrjö Kaukiainen, “Shrinking the World: Improvements in the Speed of Information Transmission, c.1820-1870”, *Research in Maritime History*, 2004, p.252.

イギリスのヘゲモニー———コミッション・ キャピタリズムの国イギリス

- 19世紀末のイギリスは世界最大の工業国ではなくなる
- ロンドンでの決済
- ロンドンには、そしてイギリスには、巨額のコミッションが流入していった。一回の取引で入手できるコミッションレートは、それ以前と比較するとずっと低かった。ところが、取引回数が大幅に増えたため、入手可能なコミッションの総額はずいぶんと増えたのである。しかも、それは確実に入手されるようになった。

大衆消費社会の形成

- 消費社会 近世のヨーロッパ
- 海外からの商品 新世界
- 砂糖 コーヒー 紅茶 ジャガイモ
- 高地植物 トウガラシ
- 工業の発展 第二次産業革命 e.g.化学繊維
- 動物繊維→植物繊維→化学繊維
- 大衆消費社会 アメリカ・ヨーロッパ・日本
- 日本の高度成長

おわりに

- イギリスのサービス部門 保険と電信
- 鉄道と蒸気船 セファルディムやアルメニア人、ソグド人、パルティア人、フェニキア人らが築いたような商業ネットワークの有効性は、大きく低下
- イギリスと手数料
- すべてが、イギリスの利益になるようなパッケージを作り上げ、その中核に位置したのが電信
- 世界経済の成長とイギリス
- コミッション・キャピタリズムの国イギリス 金融の大英帝国
- 地主ジェントルマンから金融ジェントルマンへの変化
- ITと金融社会 不平等な社会へ